

の中国への伝播とその結果としての中国神話におけるオリエント神話との類似については、最初から否定してはならないのであって、個別のケース毎に検証し、評価しなければならぬ。

最後に付け加えるならば、著者がオリエント神話と中国神話を比較するために重ねた努力は並大抵ではない。もちろん、資料は原典で読むべし、すなわち中国語文献だけでなくオリエントの楔形文字資料も読めるべきだという意見もあるに違いないが、現在の世界の学会において、これら両地域の古代言語に堪能である研究者を私は知らない。だから、自らの比較研究にとって重要と感じられたオリエント神話関係の未邦訳の文献（S・N・クレマー『聖婚——古代シュメールの信仰・神話・儀礼』新地書房、一九八九年、ジョン・グレイ『オリエント神話』青土社、一九九三年。ただし、前者は小川英雄との共訳）を自ら翻訳してしまうという献身ぶりには頭が下がる。図版資料や関連文献への目配りも欠けてはいない。古代中国と一口にいっても殷代から現代の少数民族の資料まで、文献テキストのみならず、考古学的なものや図像的なものにまで幅広い目配りが必要となってくる。そして古代オリエントといっても、シュメール、アッカド、ヒッタイト、ウガリット、カナン、イスラエルとあるし、ギリシア、ローマの資料への注意も必要である。資料的な制約を、広い地域の各種の膨大な資料を比較するという方法論的な努力によって何とか突破しようとする著者の研究姿勢に、評者は強い共感を覚えるものである。

高橋 原著

『ユングの宗教論——キリスト教神話の再生——』

専修大学出版局 二〇〇五年一〇月一五日程

四六判 三〇四十一八頁 二九〇〇円＋税

森岡 正芳

ユングを思想史のあるいは宗教史的にどのように評価するか。欧米ではもちろんのこと、日本においてもすでに水準の高い論考が多く出版されてきている。

ユングの分析心理学についてさまざまな含意でもって宗教的という表現がなされることが多いが、その内実はどのようなものであろうか。たしかにユングほど色濃く宗教について記述を残した心理療家はいないだろう。それは単に宗教について臨床的な視点から言及しているという程度のもではなく、キリスト教各派、異端の宗教運動や神秘主義、錬金術への一連の研究はもちろんのこと、ヨーガや、道教、禅の教義と行体系への根源的な研究に及び、さらには独自の「神学」としても読みうるユングの後期著作群など、ユングの宗教論を課題にするといっても、誰もがその重厚さ峻厳さにたじろがざるをえないだろう。ユングの宗教論に対してはこのような問題群を視野におきつつ、臨床的な視点、神学的な視点の両方向から接近することが必要とされる。

書評と紹介

本書はこの大テーマについて真正面から取り組んだものである。学問的な誠実さを感じ、快い読書体験として拝読した。本書はキリスト教徒としてユングが自分の心理学理論と実践をキリスト教神学との関係でどのように展開させてきたかにテーマを限定し、その跡を綿密にたどるものである。高橋は冷静に公平に主要文献を精読した上で、キリスト教神学との闘争史、それはユング個人の歴史でもあり、分析心理学の立場に立つかぎり、必ずぶつかるであろう中核課題であるが、それを見事に整理している。

全体は九章からなる著作である。主な章の注目すべき論点をあげてみよう。

序章の後、第二章は分析心理学は宗教か？と直截な問いから始まる。ややセンセーショナルな議論を巻き起こしたノル (R. Noll) の『ユング・カルト』(*The Jung Cult: Origins of Charismatic Movement*) などの本も積極的に取り上げつつ、この問題については、ノルに代表されるような、ユングの分析心理学をカルトに類似した私的宗教運動であるという論から、エディンガー (E. F. Edinger) のように、西洋の「神イメー」発展の最終段階にユングの心理学を位置づけるものまで肯定否定混ざり合い、現状でも評価が分かれていることを著者は指摘する。宗教の心理学化なのか、あるいは宗教現象の分析に依拠しつつ心理学を深化させたのか。引用される各論はそれぞれ説得力があつて興味深い。なかでも、魂の多様な現実性を受け入れる多神教的心理学的姿勢と、理想や統一を目指す一神教

的神学的姿勢を分けるヒルマン (J. Hillman) の視点はとくにユング心理学のその後の流れの軸となるものである。著者は自伝を踏襲すると、ユングは終生キリスト教にこだわり、キリスト教の神話の再生と発展を探究したのだと考えるのが妥当ではないかと考えている。ユングは第一に、個人の心内的プロセスとしての個体化過程、またその目標としての「自己」を定式化し、第二に、それによって宗教の本質を解明し、第三に、それをキリスト教の分析に応用したという図式が基本線にうかんでくる。

第三章で著者は、ユングの治療論と神学を橋渡す概念として「世界観」概念に注目している。人間の心を全体として治療するためには、本能的な極と同様に、精神的な極からもアプローチすることが必要である。心理療法的観点において世界観を検討する作業は、九・一一同時多発テロを体験した私たちには切実な課題である。古来から世界観を提供してきたのは宗教の教義と神話である。教義や神話は人間の心理的経験が定式化され、痕跡をとどめたものであると同時に、人間の内的経験を喚起し、方向づけるという機能を持っている。ユングはこれに加え、人間の意識の変化発展にともないそれにふさわしい象徴や神話が新たに生み出されてしかるべきであると考えている。従来西洋の世界観になつてきたキリスト教神話は、人間の意識の発達に応じた神話発展を怠つてきた。ユング心理学が、キリスト教に積極的に発言せざるをえないのは現代人の魂の問題が、従来果たしてきたはずの教義神話では解決しないという切迫した事情からくる。

同時にこの問題はユングの幼少期の神の直接体験と、青年期における牧師の父親との葛藤体験がライフテーマとしてからんでいる。周知の通り、ユングの死後出版された自伝はユングの宗教論をとらえるうえで核心となる体験挿話がちりばめられている。著者も引用するその自伝の冒頭に、「内的に見たとき、人とは何であるのか、また人類とは永遠の相のもとではどのようなものに見えるのか、それは神話を通じてしか表現できない。神話とは個人的なもので、生を科学よりも正確に描き出す。」とある。この文章の意味は重く深い。たしかにユングの宗教論を語る場合、その幼少期の宗教的な核体験が個人的神話を形成したことは無視できない。幼少期の神体験のモチーフ（著者はこれをユングの回心体験と位置づけている）が、父親との葛藤を引き起こし、晩年にまで継続してきたという観点を著者も踏襲し、それがユングの数々の宗教的著作を生み出したととらえている。この文脈から、著者は『ヨブへの答え』がユングの宗教論の結節点となると位置づける。第四章リツチュル（A. Ritschl）、第五章フロイト（S. Freud）、第六章ブーバー（M. Buber）、第八章ホワイト（V. White）、それぞれユングの宗教論及び独自の心理学形成に大きな影響を与えた人物とユングの論争対決を、著者は的確に記述している。彼らとの対話そして論争離反は、ユングが自伝に記載している神の直接体験を源泉とする思想形成を深めていくものであった。

第四章ではユングの宗教論のルーツとして、ユングの習作期とも目される文献を積極的に取り上げ、ユングのライフテーマにおけるキリスト教信仰との対決について、神との直接体験を

考慮しない倫理教团的なその当時のキリスト教教義理解に激越な批判を加えた。代表的にはリツチュルに対するもので、まだよく紹介されていないユングの学生期での姿が描かれる。ユングのキリスト教に対する態度は批判と期待が半ば交錯したものであることについて、正確な資料にもとづく著者の分析は貴重である。そこには牧師の父親との幼少期の葛藤の転移がみとれる。退屈な教理問答の後、謎めいた三位一体の教義にうつるとき、ユングは期待していたにもかかわらず、父はその部分を理解できないとばす。ユングは大いに失望するという幼い頃のエピソードが紹介される。

第五章はフロイトとの出会いと別れというきわめて著名なエピソードについて著者は正面からとりあげている。フロイトとの関係が良好であったときも、ユングは一貫して「神秘」（神の直接体験）によるキリスト教の再生というテーマにこだわっていた。結局のところユングの宗教理解について、フロイトからの影響変化はない。しかし、宗教や神話についてはフロイトとの対立に関わる焦点であり、宗教観の人間を支える根源性にあらためて驚きを覚える。フロイトから離れて独自の心理学を確立するという課題は、同時に宗教を肯定的に位置づける心理学の構築という課題でもあった。このように著者は述べる。

象徴や神話への感覚をよみがえらせる神体験の直接性がここでも強調される。フロイトとの決裂を通してユングは独自の自己治療の方法を開拓していく。この章では情動のリビドーへの転換、象徴論、構成的聴取などが検討されるが、臨床的にもき

書評と紹介

わめて重要な概念である。

第七章はブーバーとの論争である。ブーバーはユングの宗教論が、心内的存在を神として宣教する宗教になっていると批判した。ユングは「心的現実」こそ心理学者が神を論じる立脚点であるとし、譲らない。そこで際だってくるのが他者の問題と、善と悪の問題である。神が内面において出会う自己ならば他者という項をもたないというブーバーの批判は神学の次元では説得力のあるものである。ユングの思想に他者が欠けているという批判はよくなされるものであるが、しかし、ユングはあくまで心的現実を問題にしているのである。また二人の認識論の枠組みとしては一神教神学と多神教心理学であり、この論争は完全なすれ違いに終わっている。

ユングの思想では、心的現実として悪を神のイメージに組み込まざるを得ない。それによって人は新たな責任を負う存在になるというのがユングの到達点である。心的現実において内なる声は悪という姿によって表れる。内なる声の人格形成において果たす役割を述べるユングの良心論は、紹介に値するものである。個性全体の発達、個体化の過程において対立を抑圧しないというユングのこのような根本モチーフは、いろいろな論争のなかで形成されてきたことがわかる。

第八章で扱われているカトリック神父で心理療法家ホワイトとユングのやりとりはとりわけ重要で、キリスト教教義の根幹に関わるいくつかのテーマについて対話を重ねている。悪の問題はホワイトとの対論でますます際だってくる。とくに三位一体論に意識の発達段階説を統合するくわだては、ユングの独創

性をあらわしている。悪をどう考えるのかに関わる議論は双方譲らず終始平行線であるが、かえってユングとキリスト教双方の根本特徴が表れてきて興味深い。

キリスト教へのユングの心理学的解釈の最終的な到達点はホワイト宛て書簡の中に明確になってくる。ユングは対立物をつねに内に含むものとしての象徴という考えを深め、キリスト教をとらえていく。「キリスト」を象徴としてどう理解するのか。ユングは「自己」の象徴としては不十分である。善と悪の両面を含んでいないと考える。しかし、ホワイトはこの考えを受け入れられない。自らのアイデンティティが根本から揺らぐ問題である。それに応えてユングはキリストの象徴はもちろん有効であるとし、個体化の過程の完成に向けてその第一歩として、実現途上の自己としてキリストの象徴は活かせるとし、一つの妥協点を見いだしている。

著者は以上のような論争について、形而上学か経験科学かという基盤のちがいを明らかにするだけでは生産的な議論にはならないことを指摘し、「世界観」を問題の焦点にすることで生産的な議論の場が生まれなかっただろうかと述べている。これはまさにこれから私たちが取り組むべき課題でもあろう。

本書から宗教心理学や臨床心理学の理論、思想史をさらに展開していくことが可能となろう。評者にとってもいくつも参考になる知見を発見することができた。たとえば、聖霊をどのように理解するか。「聖霊とは創造主が受肉の相を通して達成する pneumatic な状態です。聖霊とは、キリスト対サタンの象徴によって表現されている絶対的対立を通して、自我を完全に廃

棄することを引き受けたすべての個人の経験です」。このようなユングの言葉は神学の立場からはいろいろな議論がまきおこることは当然であるにしても、キリスト教とその思想史、そして実践の意味をとっても新鮮に感受させてくれる。

キリスト教の伝統との連続性ということに意識的であるという点において、ユングは他の多くの新宗教、疑似宗教的心理学思想とは区別される。著者もこのように述べているが、このことは百花繚乱とも思えるセラピー文化の隆盛のこの時代においてこそ強調されるべきであろう。

ユングの分析心理学にかぎらず、心理療法が宗教思想のなかでどのような位置づけであり、これからどのように担っていくのかを考えるうえでもこの論考は参考になる。分析心理学の立場をとらなくとも、実践において、魂や悪の問題に接触することとは多い。神経症という問題は世界観、世界と自己との関係をぬきには考えられないことが出てくるからだ。個体化のプロセスは三位一体の教義の展開形とみることもできるという指摘や、第六章にくわしく述べられているグノーシス主義の救済神話が個体化理論の源泉であることの意味について、心理療法の実践家もよく考えるべきであろう。ユングが早くからキャッチしていたように現代人の魂の危機はますます深刻である。スピリチュアリティに関わるさまざまな代替医療や、ヒーリングワークが続出しているこの時代こそ、ユングがこのように真剣にキリスト教と対峙してきたこと、全体へと再結合を志向する現代人がもつめる神話の意味を確認すべきであろう。

続刊を期待したい。本書はユングの幼少期における神の直接

体験、いわば個人神話を主導動機にして宗教思想形成のプロセスを解明したものである。一方臨床場面でも同様の観点が必要なのだが、たとえば夢の扱いについて個人的な体験や外的状況に関係づけて解釈するレベルだけではなく、個人の体験とは直接関係のない集合的無意識の意識化という「構成的解釈」のレベルからもアプローチする必要がある。本書を拝読しつつ、ユングは心の客観性や心的現実ということをしきりに強調すること気づかされた。それは宗教史に蓄積されている教義や神話に正面から取り組むことの要請へとつながる。ユングの著作は神話形象性を基盤としたイメージ思考がなぜそれほど優位なのか。教義や神話は、個人の夢と同じように分析することが可能な、人間の心理的体験の象徴的表現である。高橋はユング思想の系統的な読みを通じて、この課題へとさらに向かって行くであろう。

さらに神学としてのユング心理学を意識し、それに対応する著作のなかでもっとも重要と高橋もくり返し言及する『ヨブへの答え』とさらには晩年のユングの著作群について、高橋自身のよりつつこんだ解説を期待したい。